

SPECIAL REPORT

高精度放射線治療がスタート。 乳がん治療の 理想的な環境が整った。

乳腺外科特集

乳がん専門の医師が3名。院内外のチーム医療を見つめ、早期発見と理想の集学的治療に挑む。



CHAPTER 01 治療の選択肢を大きく広げる、 知多半島で唯一のラディザクト。

乳がんの治療は、手術療法、放射線治療、化学療法、内分泌療法の組み合わせとなる。そのなかで「充実した放射線治療施設があるかないかは、重要な問題です」と言うのは、公立西知多総合病院 乳腺外科部長の小川明男医師（乳腺指導医、乳腺専門医、乳癌認定医）である。

「乳がん治療の多くは手術から始まりますが、そのとき温存術（乳房を全摘出せず、部分的に切除する）となる患者さんが6割〜7割います。温存術では、術後に残存乳房に放射線照射を行うことで、これが切除と同等の治療となります。また、乳房を全摘出したとしても、進行例では胸壁全体（手術をした胸の範囲、首のつけ根で鎖骨の上の部分）に照射を行う。つまり、乳がん手術には、放射線治療が必須なんです」。

その放射線治療において、同院は平成31年4月、最新放射線治療装置トモセラピー・ラディザクトを導入した。この装置は、がんの形や大きさ、場所に合わせて、がん病巣をピンポイントで照射する、低侵襲の高精度放射線治療が可能。知多半島では同院にしかない装置である。小川は言う。「手術法も抗がん剤もめざましい進歩を遂げています。それに高精度の放射線治療装置が導入され、集学的治療に必要な

CHAPTER 02 地域連携パスに基づき、 地域のチーム結成を見つめて。

乳がんは、女性がかかるがんのなかでもトップに位置づく。その一方で、乳がん検診が普及し、早期発見に繋がるケースは増えてきた。「しこりを自分で見つけたケースより、検診で見つかる方が、腫瘍が小さい段階で見つかりますね」。そう言うのは乳腺外科部長の伊東悠子医師（乳癌認定医）である。「だからこそ、乳がん検診を受けてほしいのですが、マンモグラフィは痛いから、また、恥ずかしいからという方もいらっやいます。当院には、放射線科も臨床検査科も女性技師が中心となり対応しています。東海市・知多市には、住民健診として乳がん検診もありますから、ぜひとも受診していただきたいですね」。

乳がん検診の後、精査となった場合、乳腺外科では、最高スペックの検査機器、検査体制をフル稼働させ、迅速に実施する。マンモグラフィをもう一度行い、さらにはト

なピースが揃ったことで、当院における乳がん治療の選択肢と幅が一段と広がりました」。

診療には患者ごとに主治医がつくのはもちろんだが、野尻 基医師（外科専門医）は「乳腺外科は個人プレーではありません」と言う。「治療方針一つとっても、手術・放射線・抗がん剤をどう組み合わせっていくか、これしかないという答えはありません。だからこそ乳がん専門の医師3人が意見を出し合い、その患者さんに本当にふさわしい治療を追求しています。また、がん診療の経験豊富な他科の医師、多職種（看護師、放射線技師、薬剤師など）が加わったカンファレンスも、目的ごとに週に3回ほど実施。新しい環境が整ったなかで、さまざまな専門家とともに、一人ひとりの患者さんを見つめた治療提供に全力を注いでいます」。

COLUMN

● 乳腺外科の強みを聞くと、小川は「緊急時への迅速対応」だと言う。「例えば、抗がん剤治療中で、少し熱が出たとき。また、骨転移による四肢病的骨折、脊髄麻痺、強い痛みなど、緊急性の高い症状にはすぐに対応します」。そこでは看護師の力も大きいと小川は言う。「当院には、がん、乳がんに関わる看護のエキスパートが多数いて、電話対応も行います。地域の方が困ったときにすぐに対応する。それは市中病院の使命と考えます」。

モシンセシス、乳腺エコー、必要に応じて細胞診、組織診、MRI検査などを行う。なかでもトモシンセシスは、多方向からのX線照射により1mm厚の3D断層画像を得る技術。これに対応する最新鋭の乳房撮影装置も整備されている。精査は、原則、一日のうちに実施し、次の受診時に結果を説明。診療所からの紹介の場合は、診療所の先生宛にも情報共有を迅速に行う。

乳腺外科の今後について、小川はこう語った。「院内では（多職種連携）により、乳がん診療を進めています。今後は、（多職種連携）を地域に広げていきたいと考えます。すなわち、乳がんの地域連携パスの確立に力を注ぎ、地域の診療所、訪問看護などの方々とチーム構築に繋げていく。そうあってこそ、この地域で乳がん治療が完結できると思います。医療は精神的にも生活面でも、苦痛を少なくするのが基本。早期発見や継続治療のために、（地域でチーム）結成をめざしていきます」。

BACKSTAGE

地域のなかで、がん診療が 完結する仕組みを作る。

● 同院が、知多半島で初めて高精度放射線治療に対応可能なトモセラピーを導入した際、院長の浅野昌彦医師はこう言った。「最新治療を知多半島全体の医療資源として役立てたい」。そこには、自院だけではなく、地域全体のがん診療の高度化を願う気持ちがある。また、高齢化に伴いがんにかかる人が増えた今日、安定的な継続ケアを進める上で、病院と診療所との連携は不可欠。乳腺外科がこれから力を注ぎたいとする地域連携パスもまた、地域全体でのがん診療には必要である。

● 地域全体で、いかにがん診療の仕組みを作るか。それは知多半島だけの問題ではなく、どこの医療圏でも重要課題。医療機関には、広く地域全体を見つめる目が期待される。